

## 論文内容の要旨

論文題目 : **Negotiation, Interpretation, and Emerging Voices :**  
**The Grassroots NGO in the Local-Global Interface (Uttar Pradesh, India)**

(日本語題目) 教育開発援助とグラスルーツ NGO :

グローバルドナー、ローカルコミュニティとのネゴシエーション

(インド ウッタール・プラデッシュ州の事例から)

氏名 : 中柴春乃

本研究は、教育開発援助プログラムの中でグローバルなドナーエージェンシーとローカルコミュニティの双方と関わる位置づけにあるグラスルーツの NGO の活動と役割を通して、グローバルとローカルのインターフェースで生じるダイナミクスを明らかにすることを目的としている。その際に本研究では、開発プログラムを、対象となる人々の生活をある一定のグローバルスタンダードに統一化しようとする「グローバルフォーマット」のひとつの形態であるにとらえ、それによって「ローカルコンテンツ」、つまりローカルからの様々なレスポンス (受け入れ、抵抗、読み替え、再構築) の独自性がより際立たせられるという枠組みによっている。

これまでの社会開発の分野で活動する NGO についての研究では、NGO と国際的な機関やグローバルな場での政策決定における NGO の役割に注目した研究、NGO と政府の関係 (協調と競争の緊張関係)、またはローカルコミュニティでのプログラムの実践、というように、NGO とローカル、ナショナル、またはグローバルのいずれかのレベルでの NGO に焦点を当てたものが多い。そうした研究から見えてくる NGO は主に2つの姿で描かれる。ひとつは、ドナーの意向や政策による影響を被りやすい立場にいる NGO、もうひとつは、ローカルなコミュニティに変化をもたらす能動的な NGO である。本研究では、この2つの異なる顔を持つ NGO を、どちらか一方とではなく、ローカルとグローバル両方との関係を明らかにすることによって、NGO の新たな側面を提示することができた。

近年の開発の担い手のなかで NGO への期待と、実際に基礎教育の拡大の中で子どもや家

族に近い場所で活動することによる効果に注目し、本研究では、インド、ウッタル・プラデシュ州の農村地帯で児童労働の撲滅と子どもたちへの基礎教育活動を行っているクレダ（CREDA: Center for Rural Education and Development Action）研究の対象とした。クレダは草の根で活動する一方、国際機関と共同のプロジェクトに多く携わってきたため、本研究に適した対象となった。プロジェクトに関わる各機関の志向、意図、意味づけ、力関係を明らかにするために、エスノグラフィの手法を採用した。調査は、2001年11月から2002年3月まで行われ、参与観察、インタビュー、グループディスカッション、質問紙調査の方法が用いられた。調査は、NGOの活動する地元だけではなく、ドナーらのいる首都デリーでも行われ、また、NGOの現在だけではなく、入手可能な過去のドキュメントを用いて時間空間横断的な研究となった。

調査から得られた知見は六つの章にまとめられた。上記で簡単に説明した問題関心と、先行研究、方法論、クレダの活動の背景であるインドの児童労働、活動地域を社会的指標と生活の様子について第一章、第二章で論じた。第三章では、グラスルーツのNGOにかかわるグローバルなフォーマットの内容とメカニズムについて、時にはNGOを強制するという形で、どのようにまたなぜ行われているのかを明らかにした。グローバルなドナー・ファンディングエージェンシーは、パートナーであるNGOとの連携が速やかにかつプロジェクトが自らの計画に沿って効果的に行われるよう、NGOの人材の拡充や戦略、概念の統合を目指すことが明らかにされた。また、クレダのネットワークやドキュメンテーションもこうした機関とのかかわりの中で発達してきた。この章では、グローバルな機関が、自らの定めたイシュー(issue)にもとづいて動いている論理が明らかにされた。

第四章では、NGOの介入に対するローカルのレスポンスについて、プログラムが意図していた成果とともに意図の外で生じたコミュニティの変化、ローカルの文脈で教育の意味がどう構築され理解されていったのかについて明らかにした。児童労働の撲滅という、この地域で長年に渡り続いてきた実践に異議を唱えたことで、初期のクレダは主に子どもの雇い主たちからの抵抗にあう。村のコミュニティは初めNGOの活動について懐疑的もしくは無関心であったが、その成果が明らかになるにつれ、理解を示し協力するようになっていった。またNGOの活動の影響は子どもが学校へ行くというプログラムの目的には留まらず、ほとんどが非識字者である親世代とは異なる子どもたちのローカルの文脈での可能性、労働から開放され学校へいくという特権的子ども時代への気づき、また、共通の目的のために共同作業を行うようになったことにより、伝統的なカーストのヒエラルキーの無効化の片鱗も見られた。さらに、クレダの活動はローカルなコミュニティに新たに「教育」というニーズ(needs)を作り出していた。そしてNGOはコミュニティから立ち上がってくる、または自らが作りだしたニーズに応えていく形で発展してきた。

以上の第三章、第四章は、グローバルとローカル両方のエージェントとの相互作用によって NGO が発達してきたこと、またそれぞれの問題の志向性に違いのあることも明らかになった。グローバルなエージェンシーは普遍的な 이슈に、グラスルーツ NGO はローカルのニーズにそのオリエンテーションがあり、2 者のコラボレーションはその違いを埋めながら行われていく過程であるといえる。

第五章では、それまでの議論をふまえ、NGO のネゴシエーション、解釈、ヴォイスを伝える機能について明らかにした。グラスルーツで働く NGO は、その基盤がローカルとグローバルの両方にある。そのクリティカルな役割として、グローバルな機関とのネゴシエーションでは、ローカルを代表する立場をとりながらも、ドナーらの 이슈に合わせて効果的にプログラムのフィールドを提示したり、開発プログラムは自らのアイディアと先導で行っているという意味の収奪(*appropriation*)を行っていた。ローカルに対するときには、閉鎖的な村社会に効果的なローカルな基盤（スタッフは地元から出ている）を強調するとともに、グローバルエージェンシーとの関係があるという反対のグローバルな顔もまた NGO がローカルで信頼を得ていく要因となった。つまり NGO は、グローバル・ローカルとの関わりにおいて、グローバルな概念（教育、ジェンダー等）をローカルに文脈化し、ローカルの声を代弁するとともにグローバルに届けるという仲介的な役割だけではなく、自ら戦略的にネゴシエーションを行いその活動を支えてきたことが明らかにされた。

NGO の機能の中で特に重要なのが「解釈」の役割である。NGO はその活動の中で、2 つの異なりうる志向、グローバルな 이슈 (*issue*) とローカルなニーズ (*needs*) を解釈し、それぞれグローバルとローカルのコンテキストにあうよう言い換えて伝えているということが明らかになった。それは両方に基盤を置くグラスルーツの NGO の重要な機能であり、開発のプログラムが円滑に進む鍵となっている。この解釈の機能は、NGO 中の明確な役割分担（フィールドに根ざしたスタッフとドナー・ファンディングエージェンシーと対応するスタッフ）によって支えられており、NGO の内部で伝えられる意味の組み替えが、例えばローカルの生の声があるままではドナーに伝わらないという点等において、一方では意味の希薄化を招くものでもあると言え、この戦略的解釈の限界となっている。

終章の第六章では、グローバルとローカルのインターフェースに位置している NGO がそのどちらでもない新たな意味・声を持ちうる可能性について指摘した。例えば、クレダのフィールドスタッフが付与する「社会的正義・集団の福祉を可能にする教育」という意味は、実はドナーやローカルコミュニティが意識している「個人の成長と権利」とは異なる新たな意味の現れであった。つまり、グローバルな収束やローカルの独自性に焦点を当ててきた従来の研究視点に加えて、本研究は、グローバル、ローカルの対話の場において別の意味が生まれる可能性のあることを指摘し、新たな研究領域の可能性を提示した。